

〔個人研究〕

梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第1章

伊集院栞、加納和雄、倉西憲一、ピーター・ダニエル・サント

1 はじめに

本稿は『サマーヨーガ・タントラ』第1章の梵文に対する和訳研究である。同書は、正式には *Sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvara*（一切仏との結合を通じたダーキニーの網からもたらされる最勝樂、などの意）と称される。しばしば略して「サンヴァラ」とも呼ばれる。saṃvara とは、一義的には「最勝樂」(śaṃvara, param sukham) を意味するとタントラ本文が述べる（下記）。

不空三蔵 (705-774) はこの題名を「一切佛集會拏吉尼戒網瑜伽」と訳す。本書がいわゆる広本金剛頂經の第九会に相当することは、『金剛頂經瑜伽十八会指帰』を読み解いた酒井真典、福田亮成、田中公明によって突き止められた。そしてこの題目の語義は、本稿で扱う第1章において明かされる。

同書は、インド中期密教と後期密教とをつなぐ過渡期に位置づけられている密教聖典であり、インド密教とくにヨーギニー・タントラの展開を知るためのひとつの鍵となるテキストである。田中によると、「母タントラの起源を解明するためには、その最初期の文献である『サマーヨーガ』に遡って、研究を進められなければならない」とされる¹。しかしこれまで、チベット訳の形でしかその完本が知られておらず、とりわけ本書は韻文テキストであるため、そのチベット語の訳文は難解を極め、現代語への訳注研究は保留されてきた。そのような状況にあって、近年、梵文原典が確認されたことにより、とくに注目を集めている。Szántó & Griffiths 2017 に従うと、同梵文写本の概要は次のごとくである。

¹ 田中 2006: 17 参照。

写本は、11 世紀後半ころに作成された貝葉であり、パーラ朝において作成された一連の貝葉写本と形態的に類似するという。また、同写本は完本ではないものの、テキスト全体の 9 割近くを保存する良質の写本である（9 章は部分が欠損、10 章は全体が欠損）。1898 年にネパールで購入され、コレージュ・ド・フランスのインド学研究室図書館に IEI SL 48 の整理番号で保管されてきたところ、長らく見過ごされてきたという。その存在をアルロ・グリフィス (Arlo Griffiths) が 2013 年の春季に確認し、アレクシス・サンダーソン (Alexis Sanderson) とピーター・ダニエル・サント (Péter-Dániel Szántó) の両者が詳細に調査を行い、本書に間違いないことを確かめた。3 者は共同で校訂本の作成を進めており、現在、その刊行が待たれている（以下、GSS 本と略す）。

ところがその刊行を待たずして、2018 年、サールナートのチベット学高等中央研究所 (Central Institute of Higher Tibetan Studies) の年報 *Dhīḥ: A Journal of Rare Buddhist Text* に、同書の梵文刊本が、先んじて刊行された。後者は上述の貝葉本を用いず、カトマンズに伝存する別の一本の紙写本をもとにして（以下、Dhīḥ 本と略す）。この紙写本 (NGMPP B112/17) は Nepal German Manuscript Preservation Project の目録には別の題名 (*Kalparājamāhātānta*) で登録されており、上の貝葉写本と同じように見過ごされてきた。このようないきさつで同書には、紙写本と貝葉写本がひとつずつ存在することが知られるに至った。両者とも 9 章と 10 章に欠損を含む未完本であるが、相互の欠損箇所が一致せず²、異読もしばしば確認されるため、写本の系統を異にする可能性がある。

かくして、サールナートの刊本が一足早く世に出たわけだが、しかし同刊本は、少なくとも 1 章を見る限り、校訂が十分に行き届いておらず、無批判での使用には耐えない。それに対して、グリフィスらが準備している梵本は、他の密教典籍における同書からの引用や借用などを網羅し、異読を徹底的に回収したうえで、テキストの質の向上に活用し、また同梵文写本の末尾の欠損部についても、他典籍から梵文を回収し、欠文を補っているなど、校訂作業が行き届

² 両梵文写本とも 10 章を欠く。9 章については紙写本 (NGMPP B112/17) が、161 偈 (*anayā mudrayā yogī pātyeti utpataticchati | sarvabuddhamayo rājā vajrasattvaḥ prasiddhyati ||*, Dhīḥ 本の偈番号による。GSS 本 225 偈に対応) までは保持するのに対して、貝葉写本 (IEI SL 48) は途中で大きな脱文を含むものの、同章の最終偈である 733 偈および章末の奥付までを保持する。

いており、難解な同書を読み解くためには必須の校訂本となっている。さらに後者は、新たに確認された紙写本 (Dhīh 本の底本) も校合に用いて、使用可能な資料をすべて網羅したテキストとして仕上がることになっている。グリフィスらの校訂本がひとたび刊行されれば、同書の梵本の決定版となることに間違いはないだろう。

本稿では、目下刊行されているサールナートの Dhīh 本を暫定的に用いつつ、文意の通じない箇所については、グリフィスらの読みを採用した。グリフィス、サント、サンダーソンによる校訂本のテキストは、いまだ刊行されていないため、その原文の提示については、当該の原語のみに留めて、極力表に出さないように努めた。またその場合は、和訳において都度その旨を注記する。刊行前の校訂本を快く参照させて下さった 3 氏に感謝したい。

また、校訂本作成作業の中心的役割を果たしたサント氏には、本稿の共著者に名を連ねることにご了承頂いた。彼の的確な梵文校訂作業の行程を経ることなしに本書を理解することはほぼ不可能と考えられるからである。ただし序文や和訳における過誤についてサント氏は関与しない事を明記しておく³。

2 本書の位置づけ

『サマーヨーガ・タントラ』の概要については、手際よくまとめた田中 2006、2010 および Szántó & Griffiths 2017 に委ね、ここでは繰り返さない。先行研究についてもそれらを参照されたい。以下には、田中とサントらの研究に沿って、テキストの位置づけについてのみ軽く触れておきたい。

上記のように、不空の『十八会指帰』所載の広本金剛頂經、第九会「一切佛集會拏吉尼戒網瑜伽」の解説文が、本書の第1章と第9章に内容的に対応する点は既に明かされており、本書の内容が不空によって知られていたことがわかる。つまり8世紀中葉までには、少なくとも本書の祖型が存在していたといえる。さらに田中は、『十八会指帰』の第六会、第七会、第八会が理趣經系の密教聖典であると理解し、第九会に相当する本書と理趣經との関連に注目する。

³ 本稿の序文と資料2、3は執筆者の一人である加納が、資料1は伊集院が担当した。『サマーヨーガ・タントラ』の梵本校訂はサントが担当し、和訳は伊集院、加納、倉西が分担した。

事実、『理趣広経』（特に「真言分」）の内容は本書と密接に関連しており、共通する偈も少なからず確認されている⁴。さらに田中、苦米地、サントらに指摘されるように、本書は、『理趣広経』系の『金剛場莊嚴タントラ』と多くの平行偈を有し⁵、『トリサマヤラージャ』との平行偈なども存在する⁶。これらのテキストは、基本的には本書に先行するものと予想されている⁷。このように『理趣広経』の延長上に本書が成立したとの理解は、田中が指摘するように、『十八会指帰』における該当会の配列順序とも軌を一にする。

またサンダーソン⁸は、本書がヨーガ・タントラの伝統に基づきつつもヨーギニー・タントラへの展開の端緒を開くものだという。具体的には、ヘールカ信仰を全面に打ち出し、ガナ・マンダラを導入し⁹、テキストに全文韻文からなる様式を採用したとする。そしてこれらの点は、密教の伝統がヴィドヤーピーター系のシャークタ・シヴァ派の性質を濃縮していったことを示すという。

本書が後代へ与えた影響については、『ラグサンヴァラ』を始めとする9世紀以降に成立したヨーギニー・タントラ系テキスト、および8-9世紀以降の学匠らであるヴィラーサヴァジュラ、ジュニャーナパーダ、アーリヤデーヴァなどによって著された密教論典が、本書から偈を借用・引用する点が夙に指摘されてきており、田中、サントらはその代表的な例を挙げる¹⁰。また本書の地理的な拡がりを示す資料としては、インドネシアにおいて本書に基づくブロンズ像のセットが存在する点、松長恵史によって報告されている¹¹。

3 根本タントラか続タントラか

本書の題名は、上記の現存する梵文写本2本において各章毎の末尾に付される奥付によると、*Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvara* と呼ばれている。この題名の語義については後述する。

4 第1章24偈、第6章15-16偈、第9章160偈前半など、田中2006: 27-28など。

5 田中2010: 340は本書第1章1-17abとの平行関係を指摘する。

6 Szántó & Griffiths 2017: 368-369。

7 田中2007: 219は『金剛場莊嚴タントラ』の成立が本書より遅れると結論づける。

8 Sanderson 2009: 145-156。

9 本書のガナマンダラについては静2007: 65-69も参照。

10 田中2007: 211-214、Szántó & Griffiths 2017: 369。

11 最新の報告としては松長2018がある。

本書のチベット訳¹²の場合、頭書(つまり *rgya gar skad du* 云々の箇所)でのみ「続タントラ」(*rgyud phyi ma*¹³)と呼称されるが、インドでの撰述が確定しているテキストにおいて、本書を「続タントラ」と認定する記述は今のところ見つからないといわれ¹⁴、逆に、本書が「根本タントラ」(*mūlatantra*)と呼称される例は、アールヤデーヴァに帰される『スータカ(メーラーパカ)』において梵文としてはっきりと確認される¹⁵。これらの点から、本書がインドにおいて「根本タントラ」として受容されていた点は、概ね首肯されてよいと考えられる。

そして、「根本タントラ」という相対化された呼称が示唆するのは、その対概念である「続タントラ」の存在である。そしてこの「続タントラ」とは、本来は『サルヴァカルパ・サムツチャヤ』を指していたと予想される¹⁶。この予想は、ラトナーカラシャーンティが『サルヴァカルパ・サムツチャヤ』を *śrīśaṃvarottara* と呼称していることにより支持される¹⁷。そしてそのテキスト自体(チベット訳のみ現存¹⁸)を確認すると、本文の中で「続タントラ」(*rgyud phyi ma*)と自称していることによっても補強される¹⁹。

それにも関わらず『サルヴァカルパ・サムツチャヤ』は、チベット大蔵経の目録類および、チベット訳テキストの頭書と奥書²⁰において、本書の「続々タ

¹² P 8, D 366。

¹³ 北京版では *rgyud bla ma* と記す。

¹⁴ Szántó & Griffiths 2017: 367。

¹⁵ 同書 9 章 (= *Caryāmelāpakapradīpa*, Wedemeyer 2007: 477) は、「次のように根本タントラに説かれた」(*yathoktaṃ mūlatantra*)と明言してから *Samāyoga* 3.16–21 を引用している。その後では、本書を *śrīśaṃvara* と略称している (Wedemeyer 2007: 478)。

¹⁶ P 9, D 367。Tomabechi 2007 など参照。『サマーヨーガ』の第 18–22 章に相当する。「根本タントラ」が 1–10 章に当たる。11–17 章の行方は不明である。

¹⁷ *Guṇavati*, p. 17.9; Szántó & Griffiths 2017: 368。śaṃvara とは『サマーヨーガ・タントラ』の略称である。そこに引用される偈は『サルヴァカルパ・サムツチャヤ』に対応が確認できる (*Guṇavati*, p. 17.10–12 ≈ D367, 193a4)。

¹⁸ P 9, D 367。Tomabechi 2007 など参照。

¹⁹ D 367, 193b3: *ci'i slad du'ang rgyud phyi ma*; 194a3–4: *de la ji ltar rgyud phyi ma yin zhe na ll rgyud ni rab tu 'brel bar bshad ll phyi ma gong du phyung ba yin ll de nyid gsang ba gsang chen rnam ll de yang rgyud ni phyi mar 'dod ll* (訳:「そこで、どうして「ウツタラ・タントラ」というのかというと、「タントラ」とは相統(**prabandha*)のことでであると説かれる。「ウツタラ」とは後に生じることである。それは秘密の中でも大いなる秘密であり、それがまた、ウツタラ・タントラであると認められる。)。類似の一節は『金剛頂タントラ』(D480) 154–156 偈など参照。またこの呼称については同書のアーナンダガルバ注のチベット訳においてもほぼ同様である。但し頭書を除いて、本文の冒頭の一箇所でのみ *rgyud phyi ma'i yang phyi ma* と呼ぶ例がある (D1662, 19b5)。検討を要する。

²⁰ D 367, 193a7, 211b4。頭書、奥書はいずれも後補の可能性が疑われる。

ントラ」(rgyud phyi ma'i phyi ma)と呼称されているため、その呼称が広く踏襲されてきた。

以上の状況を鑑みると、同書は本来「続タントラ」と呼ばれていたが、いつしか『サマーヨーガ・タントラ』が「根本タントラ」から「続タントラ」へと呼称の変更がなされた影響によって、『サルヴァカルパ・サムツチャヤ』もドミノ倒しで後ろに押し出されて、「続タントラ」の地位を本書に譲り渡して「続々タントラ」へと新たに呼称が改変された可能性が考えられる。

『サマーヨーガ・タントラ』が、「根本タントラ」から「続タントラ」へと呼称が変更された時期と経緯の解明は、今後の課題となる²¹。例えば本書に対するインドラナール注（インド撰述であることに疑惑が呈されている）が引用する未知の「根本タントラ」なるテキスト²²の存在に引きずられて、後代、場合によってはチベットにおいて、本書が「根本タントラ」の名称をこのテキストに譲った結果、「続タントラ」へと名称が変更された可能性なども含めて検討を要する²³。

4 注釈

本書の注釈についての詳細については、刊行予定の GSS 本の序文に委ねた

²¹ チベットにおける大蔵経の編纂作業がその呼称の変更に関与している可能性がある。1260-1270 年代に成書したチョムデンレルティの目録(Schaefer & Kuijp 2009: 181, 18: 22 番)は、「無上瑜伽」(rnal 'byor bla na med) の項目に、本書の題目 (sangs rgyas mnyam sbyor) を挙げ、カワベルツェクとチェタシにより訳された旨、ゲー訳師が述べる、と紹介する。そこに「続タントラ」の名称はない。一方、プトウンの目録では、ハリンボチェの訳になる本書の根本タントラと続タントラの題名を記載する (dpal sangs rgyas mnyam sbyor rtsa ba'i rgyud dang l rgyud phyi ma gnyis lha rin po che'i 'gyur, 西岡 1529-1530 番)。この 13-14 世紀の時期に呼称の変更が行われた可能性を検討してみる必要がある。

そして田中 2010: 333 n. 6 は、敦煌写本の中に本書の第 5 章を対応する断片、言及、関連記述があるというが、本書を「続タントラ」と呼ぶ痕跡は見つかっていない (大英図書館 Stein 将来本, IOL Tib J 419.11)。Dalton & van Schaik 2006: 196f (IOL Tib J 454), 313 (IOL Tib 716) も参照。

なお蛇足となるが、『秘密集会』のように最終章を続タントラと呼ぶ習わしが、かつて本書にも存在した可能性も想像される (例えば本書の貝葉本は第 9 章で終了している)。

²² 田中 1996: 196 など参照。本稿が扱う『サマーヨーガ・タントラ』とは異なる。見える人にしか見えないミステリアスな「根本タントラ」の存在を後付けで提示するのは、後期密教タントラの注釈家たちの常套手段であり、本書のみに限ってみられる現象ではない。また『サルヴァカルパサムツチャヤ』の奥書には、同書が「1 万 8 千」(khri brgyad stong pa, D367, 212a6-7) 詩節分の分量の『サマーヨーガ・タントラ』に基づく旨、言及する。田中が指摘するように、この分量は現存する本書のサイズの 18 倍ほどになる。

²³ その時期は、上記の注でみたように、チョムデンレルティの目録において本書は「続タントラ」と呼ばれていないため、インドラナール注をテンギュルに入蔵させたロサル目録以降に、その呼称が発生した可能性がある。結論は保留し課題としたい。

い。以下には要点のみ述べる。チベット大蔵経に含まれる本書の注釈は主に以下のものがある。

- ①インドラナーラ、*dPal sangs rgyas thams cad dang mnyam par sbyor ba mkha' 'gro sgyu ma bde mchog gi rgyud kyi don rnam par bshad pa* (D 1659, P 2531)
- ②プラムディタヴァジュラ、*Sangs rgyas thams cad dang mnyam par sbyor ba mkha' 'gro ma sgyu ma bde mchog gi 'grel pa mnyam sbyor gyi rgyan* (D1660, P 2532)
- ③シャーキャミトラ / インドラブーティ、*dPal sangs rgyas thams cad dang mnyam par sbyor ba zhes bya ba'i rgyud kyi dka' 'grel* (D1661, P 2533)
- ④プラシャーンタミトラ、*Sangs rgyas thams cad dang mnyam par sbyor ba'i dka' 'grel* (D1663, P 2535)

①のインドラナーラ (brgya byin sdong po) の注釈は、上記注釈類の中では最大の分量をもつ。1305 年前後に成立したウーパ・ロサル目録 (旧ナルタン寺テンギェル目録) の段階でテンギェルに入蔵しているが、チベットで撰述された作品ではないかとの疑いも呈されている²⁴。②のプラムディタヴァジュラ (rab dga' rdo rje) の作は、作中でアーナンダガルバとプラシャーンタミトラの名前に言及することから、彼らよりも後に成立したものとみられる²⁵。③は奥書においてインドラブーティの作とされるが、実際はインドラブーティから教えを授かった、その弟子シャーキャミトラの著であることが指摘されている²⁶。④の作者プラシャーンタミトラ (rab tu zhi ba'i bshes gnyen) は、ジュニャーナパーダの弟子と

²⁴ 田中 1996: 196、田中 2010: 333-334、Szántó & Griffiths 2017: 368。インドラナーラ注は、ロサル目録の中でも後補である第 19 章 (dpe dkon pa phyis rnyed pa、[後に得られた稀書]の章) の函番号 Mi において追加されている (Jampa Samten 2015: 107, no. 1416)。なお、この人物の名 brgya byin sdong po を「インドラナーラ」とする還元梵語は、田中、サントなどに従った。

²⁵ Szántó & Griffiths 2017: 368。D 1660, 401a3: rab zhi bshes gnyen dang ! kun dga' snying po ni dkyil 'khor sgom pa rdzogs (401a4) nas stong pa nyid kyi ting nge 'dzin las bslang ba nas bskul par 'dod do ||。この前後で龍樹、インドラブーティ、ジュニャーナパーダ (ye shes zhabs) の立場も紹介している (401a2-3)。

²⁶ Szántó & Griffiths 2017: 368。

(68)

もいわれ、10 世紀以降のテキストに言及しないことから、9 世紀頃の人物と予想されている²⁷。

本稿では、紙幅の都合上、主に②と④を参照する。そして、①②④については第 1 章の各偈の注釈箇所の所在を一覧表にして、本稿末の資料 1 に提示した。

なお、アーナンダガルバが本書への注を著したことは、マハーマティデーヴァの『ヴァジュラパンジャラ』注における言及などに基づいて予想されているが、見つかっていない²⁸。また、本書の続々タントラとされる『サルヴァカルパサムツチャヤ』に対するアーナンダガルバの注がチベット大蔵経の中に収録される (D1662, P2534)。その他の関連するアーナンダガルバの作としては、本書の儀軌『ヴァジュラジュヴァーローダヤー』が梵本でのみ現存している²⁹。

5 章立て

本書を構成する各章 (kalpa) には、以下のような題名が付される。

- 第 1 章 最勝真実を明示して主題に入るための智のムドラーの章
- 第 2 章 吉祥金剛薩埵の瑜伽の章
- 第 3 章 一切女尊の集会による幸運の吉祥三昧耶の章
- 第 4 章 遍く一切の最高の幸運の成就という吉祥三昧耶の章
- 第 5 章 説教のムドラーの智の章
- 第 6 章 一切仏の集会たるダーキニーの曼荼羅の章
- 第 7 章 一切曼荼羅のムドラーの智の章
- 第 8 章 一切供養の集会の幸運たる吉祥三昧耶の章
- 第 9 章 遍く一切の三昧耶の章

²⁷ Szántó & Griffiths 同。

²⁸ Szántó & Griffiths 同。プラシャーンタミトラについては Szántó 2015: 547 も参照。

²⁹ Isaacson 2009: 112–123、Sanderson 2009: 147ff、Ijuin 2018 など参照。その他の儀軌については Szántó & Griffiths 同を参照。

第10章 (無題、梵本欠³⁰)

各章の偈数については田中 2010、Dhiḥ 本、GSS 本で異同があるが、第1-4 および 8 章は、各々 25 偈前後、第 5、6 章が 90 偈前後、第 7 章が 70 偈前後、第 9 章が 540 偈前後あり、第 10 章が 18 偈ほどである。各章の章末に付される奥付は下記の通りである（主に Dhiḥ 本によるが適宜訂正した）。

sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvarāt paramatattvālokaviṣayāvatārajñāna-
mudrākālpaḥ prathamah
sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvarāc chrivajrasattvasaṃyogakalpo
dvitīyaḥ
sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvarāt sarvadevisamāyogasubhagaśrīsamaya-
kalpas tṛtīyaḥ
sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvarāt sarvato-viśvasubhagottama-
siddhir nāma śrīsamayakalpaś caturthaḥ
sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvarāt kathāmudrājñānakalpaḥ pañcamah
sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvarāt sarvabuddhasamāyogaḍākinimaṇḍala-
kalpaḥ ṣaṣṭhaḥ
sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvarāt sarvamaṇḍalamudrājñānakalpaḥ
saptamah
sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasaṃvarāt sarvapūjāsamāyogasubhagaśrīsamaya-
kalpo 'ṣṭamah

(Dhiḥ 本は第 9 章の奥付を欠き、10 章全体を欠く。GSS 本は第 9 章の奥付を有するがここでは割愛する)

³⁰ チベット訳には「第 10 カルパ」とのみ記述され章題を欠く。そしてその末尾には次のような奥付がある。le'u bcu pa'o || ... sangs rgyas thams cad dang mnyam par sbyor ba mkha' 'gro sgyu ma bde ba'i mchog ces bya ba'i rtog pa || rtog pa thams cad kyi 'khor lo bskor ba chen po bde ba chen po rdzogs so ||

6 第1章と題目の語義

本書は従来の仏典に見られる冒頭句「如是我聞」以下を欠き、テキストは唐突に始まる。第1章の要旨および題目の語義は、サントラによって提示される³¹。第1章の内容は概ね3つに分かれる。

1-2 偈は、金剛薩埵が *sarvabuddha-samāyoga-ḍākinī-jāla-saṃvaraḥ* であることを説く³²。そして3-17 偈は本書の題目の後半 *ḍākinī-jāla-saṃvara* の語を解釈し、18-25 偈は題目の前半 *sarvabuddha-samāyoga* の語を解釈する。

このうち *sarvabuddha* の語は、第1章では複合語のなかにのみ登場し単独では見られないため、文法的な数が単数なのか複数なのかは判然としない。例えば2.12bでは *sarvabuddhair* という複数形が出るが、2.13cでは *sarvabuddhaḥ* という単数形が出るので、双方とも理解がありうる。単数の場合は『真実撰経』などに出る毘盧遮那仏としての「一切如来」を指すと理解できる³³。いずれかに統一せずに両者の可能性を残しておきたい³⁴。1.19-25は「一切仏の境地」(*sarvabuddhatva*) が自己においてこそ完成する旨を述べる。中でも1.20-22は、自己の外部にある仏像との瑜伽を真実ならざるものとして戒めるが、この記述は『十八会指帰』の第九会の言及と一致する³⁵。

そして *samāyoga* の語は、「自己と至高神との瑜伽により、自己こそを成就すべし」(1.24)と説くため、*sarvabuddha-samāyoga* という語を、一切仏と自己とが等しい存在として結合すること、と解釈することも可能である。ただし、これら偈頌にはこの語のもつ多義が示唆されているため、訳語を一義的に固定することは控えたい。例えば *samāyoga* の語には、不空の訳したように「集会」の意味もある。本書2.12dでも「一切仏の集会」(*sarvabuddhasamāgamaḥ*) という表現が登場する。

ḍākinī の語は、1.7-9に説明される。この語の要素を構成する動詞語根 *ḍai* は、

³¹ Szántó & Griffiths 2017: 370。また Sanderson 2009: 156は、この題目が、散逸した2つのヴィドヤーピータ系のシヴァ派の聖典、すなわち *Sarvavīrasamāyoga* と *Ḍākinījālaśaṃvara* に範を取った可能性を指摘する（種村氏のご教示による）。

³² アバヤーカラグプタによると、「果のタントラ」としての持金剛にほかならない、という。【資料2】参照。

³³ Szántó & Griffiths 2017: 370。

³⁴ 後代の『アームナーヤマンジャリー』は複数で理解する（【資料2】参照）。

³⁵ 福田 1974。

「虚空を行くこと」を意味し、「その歩みが全虚空に行き渡る悉地」を指すという(【資料2】も参照)。jālaの語は「幻」(māyā)の意味をもつと説明される(1.3-5)。

śaṃ-vara または saṃvara の語は (s/ś は音価が通じるとする)、まず「大楽」(mahāsukha)を意味すると語られ、そして、あまり明確ではないが、「一切の幻における諸実践による抑制 / 正しい力」(sarvamāyāprayogais saṃvaram)(1.10)を意味することも重ねて語られているようである。つまり、saṃvara という一語に対して、「最勝楽」(śaṃ-vara) という意味と、動词语根 *vṛ* から派生した「遮断」「抑制」(saṃvara) との両義が重ねられているといえる。このうち「抑制」の意味については、「楽」(śaṃ)を「諸々の罪惡から取り出して遮断する / 守る」(avadyebhyo bahiṣkṛtya vṛpoti) と理解する後代の例もある(【資料2】110r3 参照)。

以上のように、本書の理解に沿うならば、sarvabuddha-samāyoga-ḍākinī-jāla-saṃvara をただ一つの意味で翻訳することは困難である。本稿で示す訳語は、その中の一つを取り出した仮の訳にすぎない。また本書の第10章にもこの題目の意味に触れる記述があり、今後あわせて検討する必要がある。

7 題目の語義を理解するための補助資料

本書の題目の語義を理解するためには周辺のタントラ注釈文献類が有益な資料となる。中でも『アームナーヤマンジャリー』第3章(Skt. Ms. fol. 108v5-111r3)はこれを詳細に説明する³⁶。同書は『サンプトードバヴァ』の注釈だが、『サマーヨーガ』(1章では2cd, 5cd-8ab, 11cd, 13)との平行偈を注釈するため、間接的にそれらの注釈が得られる。その梵文テキストと訳は参考資料として本稿末尾の資料2に提示した。

そこでは題目について3通りの解釈が提示される。つまり、§1「一切諸仏との結合を有する者であり、かつダーキニーとジャーラ(般若と方便)とに基づき最勝楽(または楽の庇護)を有する者」、§2「一切仏の結合によってダーキニーの集合と一体化するもの」、§3「一切諸仏との結合によってダーキニーたちという幻を持つ者であり、かつサンヴァラなるもの」である(§1-3は【資料2】参照)。順次、了義の解釈、未了義の解釈、第三の解釈とされる。

³⁶ およそ3種類の異なる解釈が並べて提示される

また同書のダーキニーの語義説明は、ラトナーカラシャーンティの『グナヴァティー』の一節を下敷きにしており、それは前者の内容理解のための必須の資料であるため、その梵文と訳を【資料3】に提示した³⁷。

ただし『アームナーヤマンジャリー』が示す解釈は、『サンプトードバヴァ』の注釈としての立場をとっているため、そのすべてが本書の理解に直接役立つとは限らない。そのため、本書の和訳に際しては参照するに留めた。

また他書をみると、例えば本書の題目の語義のうち *ḍākini-jāla-saṃvara* について、ラトナーカラシャーンティの『ムクターヴァリー』は、「ダーキニーたちの、ジャーラ、つまり輪（会座）、それを通じたサンヴァラ、つまり最勝の樂である」と説いて、その語義と複合語について分析する（【資料3】参照）。つまり *ḍākini-jāla-saṃvara* を「ダーキニーたちの会座を通じた最勝の樂」という意味で理解する³⁸。そしてプラシャーンタミトラは『金剛場莊嚴タントラ』注においてこの題目の語義を「一切仏による顕示 (*gsal bar byed pa*) とダーキニーたちの集合 (*tshogs*) とを本質とする最勝の樂」と解釈する³⁹。

8 第1章と『理趣広経』

本書と『理趣広経』(*Paramādyā*)と本格的な対照研究は今後の課題だが、その一部を紹介しておきたい。たとえば本書第1章の12-15偈は、『理趣広経』「真言分」第8章の4つの偈と関連している。以下順に『理趣広経』と本書の対応偈を並記する。『理趣広経』の偈は次の通り（訳文は大正大学密教聖典研究会による）。

適切に、自身の心を観察することを始めとする仏の菩提 [を本質とする者] となるべし。彼はまさに、魔であり、仏であり、金剛を手にする者であり、偉大な持金剛である。

まさに彼は、如来部であり、偉大な金剛部であり、清らかな蓮華部であり、

³⁷ 『アームナーヤマンジャリー』においてダーキニーの語は、「虚空を行くことにより遍く行き渡る者」、または「所縁なき智を自分のものとする習性をもつ者」の意味で解釈されている。前者はラトナーカラシャーンティ、後者はバヴァバッタの理解に各々拠っている。【資料2】fol. 109v5 以下を参照。

³⁸ 『ムクターヴァリー』p. 143.15-16 (on *Hevajra* 2.2.61): *ḍākinīnām jālaṃ cakram tena saṃvaraṃ sukhaṃ caran* (read: *varam*).

³⁹ D2515, 351a5-7。

すばらしい摩尼部と言われる。

まさに彼は、貪欲かつ離欲であり、愛欲 [の享受] によって解脱し、三時であり、三有たる三最上であり、三世であり、三界である。

彼はまさに、全ての動かないもの（世間）の最勝者であり、固く堅固であり、大摩尼であり、心のはたらきによって動くもの（有情世間、有為）であり、あらゆる行為をなす者であり、全てである⁴⁰。

『サマーヨーガ』1章 12-15 偈（GSS 本に従う）：

これ（asau、つまり幻）は、心、衆生（行者）、三昧であり、種々なる菩提行、魔、魔を征する者、菩提、仏となる。

[またこの幻は] 金剛、持金剛、蓮華、持蓮華者、宝珠、持宝珠者、そしてそれら（六種）の族となる。

同じそれ（幻）は貪かつ離貪であり、これは欲かつ解脱となる。それは、三時、三有、三頂、三世、三界となる。

これ（幻）は、一切の不動なるもので、一切の種々なるものとなるであろう。これは、いつでも遍く一切の動くものとなる。

これらは『理趣広経』と本書とのつながりを示す貴重な手掛かりとなる。『理趣広経』では、自心（rang sems）が、時には相互に矛盾するあらゆるものになりうることを説く。いっぽう本書は、幻（māyā）がそれになりうることを説く。『理趣広経』にはアーナンダガルバによる浩瀚な注釈『プラジュニャパーラミトーダヤー』（**Prajñāpāramitodayā*⁴¹ *Śrīparamādyatikā*, D2512）が存在する。それを通

⁴⁰ チベットテキストは同研究会の校訂本にもとづく。D488, 186b5-8: rang sems so sor rtogs sogs ni || sangs rgyas byang chub cho ga bzhin || bdud ni sangs rgyas rdo rje can || rdo rje 'chang chen de nyid yin || de nyid de bzhin gshegs pa'i rigs || de nyid rdo rje rigs chen po || de nyid pad ma'i rigs dag pa || de nyid nor bu'i rigs dam pa || **de nyid chags dang chags bral ba'i || 'dod dang thar pa de nyid yin || dus gsum srid gsum mchog gsum dang | 'jig rten gsum dang khams gsum pa** || mi g-yo thams cad mchog de nyid || brtan zhing snying po nor bu che || rgyu ba sems kyi 'du byed thabs || thams cad byed pa thams cad nyid || とくに太字の箇所は『サマーヨーガ』1.14 とほぼ一致する。

⁴¹ チベット語 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'byung ba* から想定したサンスクリット。

じて間接的に、本書の偈（『理趣広経』との平行偈）についての彼の理解を知ることができる⁴²。

9 和訳について

以下に試みる和訳は、基本的に Dhīḥ 本を用いた。ただし Dhīḥ 本の読みに問題のある箇所はそれを採用せず、GSS 本の読みに従った（但し 1.11ab 句は *Samputa* 1.3.7ab によって訂正）。GSS 本は未刊行であるため、読者の便宜を図るため、当該の文言の原語を訳文中に丸括弧内に下線を付して提示し、読み方の違いを注記した。例、(ekaivādhidaivataḥ)。但し 2 本において読み方が同一であるならば、それが複合語か否かの違いがあるとしても逐一注記せずに妥当な形を提示した。Dhīḥ 本の連声の不備についても逐一指摘しない。各々の読みについての、具体的な根拠については、刊行予定の GSS 本に委ねる。第 1 章の中で他のテキストと共有される偈については、GSS 本において網羅される予定であるため、本稿では割愛した。

必要に応じて、プラシャーンタミトラとプラムディタヴァジュラの注釈における理解を注記に示した。訳文中の角括弧は文脈上補った言葉を示す。丸括弧は補足的説明を示す。

和訳

1.1

秘密かつ最勝にして喜ばしい全存在⁴³に (sarvātmani) 常に立脚し、一切仏からなる (sarvabuddhamayaḥ) 薩埵(勇者)たる金剛薩埵は、最勝樂 (param sukhaṃ) である。

1.2

⁴² D2512, 122a1–123a4。

⁴³ あるいは「遍在しているもの」や「あらゆる存在におけるアートマンを持つもの」とも訳しうる。プラシャーンタミトラ注 (D 1663, 59b3–4) のよると sarvātmani は「楼閣」を意味する。パヴァッタの『チャクラサンヴァラ』注も同様の解釈を示す (sarveṣu sthiracalādiṣv ātmā yasya tat sarvātma kūṭātḡaram, Bang 2019: §3.5.3)。本偈前半句は『チャクラサンヴァラ』1.2cd と平行する。

彼は、自生尊（独存者）であり、唯一の至高神にして (*ekaivādhidaivataḥ*)⁴⁴、一切仏との結合を通じたダーキニーの網からもたらされた最勝樂である (*sarvabuddha-samāyogaḍākinijālasamvaraḥ*)。

[ダーキニージャーラ・サンヴァラの語義]

1.3

[それは] 貪としても、離貪としても、中間としても認識されない。この一切の女性の幻なるムドラー（「刻印するもの / 喜びを恵むもの」⁴⁵）は、不二なる最高乗である (*advayaṃ yānaṃ uttamam*)⁴⁶。

1.4

あらゆる幻のなかでも (*sarvāsām eva māyānām*) 女性の幻は格別である (*praviśiṣyate*)。というのは、それ（女性の幻）は本来的に、[因縁の] 威力を通じて、自らの本質として (*svabhāvataḥ*) 完成しているからである。

1.5⁴⁷

それ（女性の幻）によって、女性たちはこの三界において尊重されるべき者となる (*upayānti hi*)⁴⁸。悪行の女性たちでさえ、一切による獲得たる安樂の宴によって (*sarvalābhasukhotsavaḥ*)⁴⁹ 成就する⁵⁰。

⁴⁴ GSS 本の読み *ekaivādhidaivataḥ* を採用する。蔵文 *gcig tu rab tu che ba'i lha* とよく一致する。Dhīḥ 本の *eka caivādhidevatā* という読みは採用しない。

⁴⁵ ムドラーの語義 (*mudrayati, mudam rāti*) については、『アームナーヤマンジャリー』の関連記述による。【資料2】参照。プラムディタヴァジュラ注はこの「ムドラー」を、「カルマムドラー、ダルマムドラー、サマヤムドラー、マハムドラー」の4つからなると解説し、「幻なるムドラー」を「止観の直観を生み出す原因の総体である」と説明する (D1660, 390b1-2)。

⁴⁶ Dhīḥ 本 1.3cd: *sarvastrimāyāmudreyam ayaṃ advayāntam* という読みは採用しない。和訳は GSS 本および蔵文 (*bud med kun gyi sgyu ma'i rgya ll 'di ni gnyis med theg pa'i mchog ll*) に従った。

⁴⁷ 1.5c-8b, 13 については『アームナーヤマンジャリー』の注釈が得られる。【資料2】参照。

⁴⁸ Dhīḥ 本の *upāyanti* は採用しない。

⁴⁹ この語の『アームナーヤマンジャリー』の理解については【資料2】を参照。そこにおいて *utsava* については、*uttarottarānubandhina utpādās* と釈す。本書第3章には、*sarvayogasukhotsavaḥ, sarvasiddhisukhotsavaḥ, sarvaiśvaryasukhotsavaḥ* といった表現がみられ、9.361d には *pañcakāmaguṇotsavaḥ* ともいう。なお *utsava* には「高まり」の意味もある。*lābha* には「楽しみ」の意味もあり、『アームナーヤマンジャリー』は官能的享樂の意味として理解する。

⁵⁰ Dhīḥ 本は *sidhyante* を *siddhyante* とする。以下にも同様の例が現れるが言及は割愛する。

(76)

1.6

[女性たちは] 一切の女性の幻を通じて、自身の姿の転変によって (svarūpa-parivartanaḥ)⁵¹ 成就する。非サンスクリット言語に準じて (milicchayā)⁵²、この (iyam)⁵³ 多様で美しい幻たる (vicitramāya)⁵⁴ ムドラーはダーキニーといわれる。

1.7

これ (ḍakini という語) における (atra) 動詞語根 (dhātur) である ḍai⁵⁵ は、「虚空を行く」という意味において (vaihāyasagamane)⁵⁶ [使用されると] 考えられている⁵⁷。その歩みが全虚空に行き渡る悉地が (siddhir)、ダーキニーである、と広く知られている⁵⁸。

1.8

ダーキニーは、遍く一切の最勝樂によって、遍く一切のムドラーであり (viśvamudrā)⁵⁹、一切仏との結合 (sarvabuddhasamāyogo) である、と広く知られている。

1.9

[動詞語根] ḍai は、「虚空を行くこと」という意味において (vaihāyasagamane)⁶⁰、

⁵¹ 蔵訳は、「あらゆる」という語を挿入する。

⁵² milicchā については以下を参照。Āmnāyamañjarī, Skt. fol. 113v3: mleccayā bhagavataḥ saṃketena (【資料 2】); Yogaratnamālā (Snellgrove 1959: vol. 2, 121.4); chomā milicchā yoginīnām saṃketenābhisamayajalpanam.

⁵³ mudreyaṃ を Dhiḥ 本は mudreya と読むが採用しない。

⁵⁴ Dhiḥ 本の読み vicitramāya は韻律破綻のため採用しない。

⁵⁵ Dhiḥ 本の読み ḍe は採用しない。以下にも同じ例が現れるが言及は割愛する。

⁵⁶ Dhiḥ 本の読み ḍe vihāyasi gamane は na-vipulā に相当するが、第 2-4 音節 (長短長または短長長) の規定と一致しない。また GSS 本の読み ḍai vaihāyasagamane も同じく一致しない。

⁵⁷ Cf. Dhātupāṭha (Böhtlingk 1887) 1.1017: ḍiñ vihāyasā gatau; Cāndravyākaraṇa Dhātupāṭha 1.487: ḍiñ akāśagamane, 4.85: ḍiñ gatau (Liebich 1902: 15*, 24*).

⁵⁸ atra, siddhir は GSS 本の読みによる。各々に対応する Dhiḥ 本の読み buddha-, siddhiḥ は採用しない。

⁵⁹ Dhiḥ 本の読み viśvamudrāṃ は採用しない。

⁶⁰ 1.7a と同様、上記参照。

仏の根源要素 (buddhadhātur、仏性) であると考えられている。一切仏を自己とするダーキニーは、一切に行き渡る悉地である。

1.10

〔śaṃvara という語の〕 śam とは、安楽 (sukhaṃ) のことであると広く知られる。つまり一切仏の大楽 (mahāsukham) である。また (tu) 一切の幻における諸実践によって (sarvamāyāprayogais)、正しい力 / 抑制 (saṃvaram) があり、それを通じて最勝楽 (śaṃvara) がある⁶¹。

1.11

これ (幻) は、どこでも、あらゆる点で、完全に、あらゆる仕方で、いつでも、自ずからのものである。一切仏を始めとする不動なものと動なるもの (つまり器世間と有情世間) からなる万物 (sarvabuddhādisthiracalām sarvabhāvām)⁶² になる。

1.12⁶³

これ (asau、幻を指す) は、心 (cittam)、衆生 (行者)、三昧であり、種々なる菩提行 (bodhicaryā vicitrādā)、魔 (māro)、魔を征する者 (mārajayī)、菩提 (bodhir)、仏になる⁶⁴。

1.13

〔またこの幻は〕 金剛 (vajram)、持金剛、蓮華、持蓮華者 (padmadharas)、宝珠、

⁶¹ śaṃvara/saṃvara という語に二義 (最勝楽と正しい力 / 抑制) を重ねて読み込んでいると理解した。『アームナーヤマンジャリー』によると、「抑制」の意味を性瑜伽の文脈でも説明する。

⁶² GSS 本の読みに従う。対応する『サンプトードバヴァ』1.3.7ab の読みは sarvabuddhādisthiracalasarvabhāvo とあり、この主格形は定動詞 bhavati と合致するため、古典梵語としては正しい。GSS 本では、これの対格形を bhavati の目的語のように用いており、古典梵語としては適切でないが、Aīśa の語法と理解して、これに従う。『アームナーヤマンジャリー』の注釈は資料 2 を参照。Dhiḥ 本は sarvabuddhādi sthiracaram sarvabhāvam とするが採用しない。前半句は 9 音節ある。

⁶³ 1.12-15 は、『理趣広経』「真言分」の一節 (D488, 186b) と関連している。本稿序文を参照。

⁶⁴ GSS 本の読みである cittam, māro mārajayī, bodhir について、Dhiḥ 本は citta-, mārāṇarūpī, bodhi- と読むが採用しない。プラムディタヴァジュラは「仏、菩提」を四族の諸仏を自体とするものと解釈する (D1660, 392a2)。

(78)

持宝珠者 (maṇidharas)、そしてそれら (六種) の族⁶⁵ になる⁶⁶。

1.14

同じそれ (幻) は貪かつ離貪であり、これは (asau) 欲かつ解脱となる (kāmo mokṣo)⁶⁷。それは、三時、三有 (生有・中有・死有)、三頂 (tryagras)⁶⁸、三世、三界になる⁶⁹。

1.15

これ (幻) は、一切の不動なるもので、多様で種々なるもの (vicitravividho) となるであろう。これは、いつでも (sarvadā) 遍く一切の動くものとなる (jaṅgamah)⁷⁰。

1.16

そして (tu) この如きものは (evamādyās)、終わりの始まりもなく (anatāgrā)⁷¹、法界

⁶⁵ 『アームナーヤマンジャリー』はこの六族を、金剛界の五仏と金剛薩埵の都合六尊として理解する (【資料2】参照)。プラムディタヴァジュラはこれら六族を順次、金剛薩埵族、ヘルカ族、蓮華舞自在族、業族、金剛宝族、毘盧遮那族に対応すると解釈する (D1660, 392a3-4)。ブラシャーンタミトラは、12偈の「魔」を金剛薩埵、「心、菩提、仏」を毘盧遮那とし、13偈の「金剛」以下の六者については順次、「五智を自体とする五髻の忿怒金剛」「持金剛」「妙觀察智を自体とする本性清浄なる法性の本質」「蓮華舞自在」「平等性智を自体とする八片の宝」「金剛日」と配当する (D1663, 62a3-5)。

⁶⁶ GSS 本の読みである vajraṃ, padmadharas, maṇidharas について、Dhīḥ 本は vajra-, padma-dharaṃ, maṇidharaṃ と読むが採用しない。

⁶⁷ 変幻自在な「幻」が、欲望と解脱という対立概念すら併存せしめるということを意図していると理解した。

⁶⁸ 「三頂」(tryagras) についてインドラナール注は「梵天、ヴィシュヌ、帝釈」を挙げる (D1659, 258b4: 'jig rten gyi gnas mchog tu gyur pa'i tshangs pa dang khyab 'jug dang brgya byin gyi ngo bor yang bzhuḡs so)。これと平行する『理趣広経』の偈について、そのアーナンダガルバの注は次のようにいう。「『三有』というのは、三兄弟のあり方を通じて衆生の利益をなすからである。『三頂』というのは、その同じものについての、特殊な別名である。」(D2512, 122b7: srid gsum zhes bya ba ni ming po gsum gyi tshul gyis sems can gyi don byed pa'i phyir ro || mchog gsum zhes bya ba ni de nyid kyi ming gi khyad par gzhan no ||)。三兄弟とは理趣経系の注釈では、マドウカラ、ジャヤカラ、サルヴァールタサーダカラの三者を指し、それらは梵天、ヴィシュヌ、シヴァに対応するという。三兄弟の詳細は高橋 2010: 69 を参照

⁶⁹ GSS 本の読みである asau, kāmo mokṣo, tryagras について Dhīḥ 本は, api, kāma mokṣa, trigra と読むが採用しない。

⁷⁰ GSS 本の読みである vicitravividho と sarvadā について、Dhīḥ 本は vicitra vividhā, sarvado と読むが採用しない。

⁷¹ ブラシャーンタミトラの注釈によると、「『終わりの始まりもなく』とは、始まりと終わりに限りがないことである」(D1663, 62b3: mtha' yas mchog ni thog ma dang mtha' thug pa med pa'o) という。

と等しく比類がない (dharmadhātusamāsamāh)⁷²。これ (幻) は、虚空界のように限りの無い万物 (ākāśadhātvaparyantām sarvabhāvām) になる⁷³。

1.17

全虚空の空間において (sarvākāśāvakāśe)⁷⁴、吉祥金剛薩埵たる如来が存する。[そしてそれが] 一切仏との結合を通じたダーキニーの網からもたらされる最勝楽である⁷⁵。

[サルヴァブッダ・サマーヨーガの語義]

1.18-19

幾阿僧祇劫をかけても得られない (aprāpyam)⁷⁶ 一切仏の境地が、そのムドラーの儀軌に従うと、ほかならぬ今生で得られる (sarvabuddhatvaṃ prāpyatehaiva janmani)⁷⁷、そのような、一切仏を自己とする最勝楽を、私は示そう (kalpayiṣyāmi)。一切仏を自己とする最勝楽は、究極的に自己を完成に導くものである。

1.20⁷⁸

非真実への志をもって専念する者たちにとって (atattvāsāyayogānām)⁷⁹、尊格を所縁とする際、似姿から成る (pratibimbamayo)⁸⁰ 瑜伽が鑄物 (つまり仏像) などにおいて (niṣiktādiṣu) 生じる。

⁷² GSS 本の読み evamādyās と dharmadhātusamāsamāh について Dhiḥ 本は evamādyām と dharmadhātuḥ samāsamā と読むが採用しない。

⁷³ GSS 本は ākāśadhātvaparyantām sarvabhāvām bhavaty asau し、Aīśa の語法として理解してこれを採用した。上記の 11 偈と同様、古典梵語としては ākāśadhātvaparyanta-sarvabhāvo bhavaty asau という表現に対応する。Dhiḥ 本は ākāśadhātvaparyantām sarvabhāvām bhavaty asau とするが採用しない。

⁷⁴ Dhiḥ 本の読み sarvākāśāvakāśa は採用しない。

⁷⁵ ṣaṭkinijāla について、虚空遍満という意味で理解している。

⁷⁶ Dhiḥ 本の読み ā prāpya は採用しない。

⁷⁷ 韻律の理由で二重に連声が適用されている (double sandhi)。古典文法における語形は prāpyata ihaiva janmani である。25 偈も参照。

⁷⁸ 20-22 偈は『十八会指帰』の第九会の記述と一致する。『十八会指帰』(大正 18 卷 286c11-12)「此中説立自身爲本尊瑜伽。訶身外主形像瑜伽者」。福田 1974 および本稿序文「本書の位置づけ」を参照。

⁷⁹ Dhiḥ 本の読み anantatyāntayogānām は採用しない。

⁸⁰ Dhiḥ 本の読み pratibimbamayā- は採用しない。

(80)

1.21

勝れた真実への志をもって専念する者たちには (sutattvāśayayogānām)⁸¹、尊格を所縁とする際、自己の瑜伽にして、自身の三昧耶たる、最勝不壊なるものが成就する。

1.22

鋳物（仏像）などの似姿において (pratibimbeṣu niṣiktādiṣu)、瑜伽は (yogaḥ)⁸² 生じない。それゆえ (tena)、菩提心に、懸命に努力することに基づいて (-mahodyogād)、瑜伽者たちは尊格たちとなる⁸³。

1.23

この菩提心は、金剛であり、自己の一切仏の境地である (sarvabuddhatvam)⁸⁴。それゆえ、完全な自己との瑜伽によって、一切仏の境地を得る。

1.24

ほかならぬ自己こそが、一切仏の境地であり、そして一切勇者（菩薩）の境地である。それゆえ、自己と至高神との瑜伽により (svādhidaivatayogena)⁸⁵、ほかならぬ自分が (ātmaiva) 成就すべし。

1.25

これ（瑜伽）によって、一切仏の境地と、一切勇者の境地と、一切持金剛の境地が、ほかならぬ今生において成就する (sidhyatehaiva janmani)⁸⁶。

このように世尊吉祥金剛薩埵は仰った。

⁸¹ Dhīḥ 本の読み sa tatvāśayayogānām は採用しない。

⁸² Dhīḥ 本の読み yoga は採用しない。

⁸³ GSS 本の読み tena、mahodyogād は、Dhīḥ 本では tvena、-mahadyogād とあるが採用しない。

⁸⁴ Dhīḥ 本の読み sarvabuddhasvam は採用しない。

⁸⁵ GSS 本に従う。Dhīḥ 本の読み svādhidevatayogena は採用しない。なお svādhidaivata は「自身なる尊格」とも訳しうる。

⁸⁶ 韻律の理由によりここでは二重に連声が適用されている（double sandhi）。古典文法における語形は sidhyata ihaiva janmani である。18 偈も参照。

『サルヴァブッダ・サマーヨーガ・ダーキニージャラ・サンヴァラ』の中から、最勝真実を明示して主題に入るための智のムドラの章 (kalpa)、第一、了。

【資料1：第1章注釈箇所対照表】

下記は本書第1章の、インドラナーラ (D1659)、プラムディタヴァジュラ (D1660)、プラシャーンタミトラ (D1663) の各注釈における各偈の釈文の所在一覧である。1-17 偈前半句までを共有する『金剛場莊嚴タントラ』に対するプラシャーンタミトラの注 (D2515) の対応箇所もあわせて掲載した（本稿序文第2節参照）。

偈 序	D1659	D1660	D1663	D2515
	245a1-248b6	389a5-b6	58b5-59a7	—
1	248b6-250b5	389b6-390a7	59a7-b4	351a3-5
2	250b5-252b7		59b4-60a1	351a5-7
3	252b7-253b1	390a7-b3	60a1-b1	351a7
4	253b7-254a7	390b3-b5	60b1-4	351a7-b2
5	254a7-b6	390b5-391a2	60b4-7	351b2-3
6	264b6-255a3	391a2-4	60b7-a3	351b3
7	255a3-b4	391a5-6	61a3-4	—
8	255b4-256a1	391a6-b2	61a4-5	351b3-4
9	256a1-7	391b2-3	61a5-7	—
10	256a7-b6	391b3-5	61a7-b3	—
11	256b6-a3	391b5-7	61b3-5	351b4-6
12	257a3-258a4	392a1-3	61b5-62a4	351b6-7 (vv. 1.12-16ab 対応箇所)
13	258a4-7	392a3-4	62a4-6	
14	258a7-259a6	392a4-6	62a6-b2	
15	(vv. 14-15ab) 259a6-b2	392a6-7	62b2-3	
16	(vv. 15cd-16)	392a7-b1	62b3-4	
17	259b2-5	392b1-2	62b4-6	—
18	259b5-260a1	392b2-3	62b6-7	—
19	260a1-4	392b4	62b7-63a1	—
20	260a4-b2	392b4-6	63a1-3	—
21	260b2-5	392b6-393a1	63a3-4	—
22	260b5-261a2	393a1-2	63a4-5	—
23	261a2-6	393a2-3	63a5-7	—

24	261a6-b2	393a3-5	63a7-b1	—
25	261b2-7		63b1-2	—
	261b7-262a5	—	63b2-4	—

【資料2】『アームナーヤマンジャリー』における『サマーヨーガ』注釈箇所
(4.7cd, 1.5c-8b, 1.13)

下記は 1120 年頃（ラーマパーラ王第 37 年目）に完成したアバヤーカラグプタの『アームナーヤマンジャリー』の中の、本稿の内容と関連する箇所についての梵文テキストとその試訳である⁸⁷。同書は『サンプトードバヴァ』に対する注釈である。『サンプトードバヴァ』は『サマーヨーガ』から複数の偈を取り込んでいる。そのため、それらの偈の中から、本書第 1 章に関連する部分を抽出し、その注釈文を回収した。両者の平行偈については Szántó 2016 を参照した。

特に本書第 1 章 2 偈後半句（4 章 7 偈後半句と一致）は、本書の題目をそのまま提示する。本書の題目は、いくつかの解釈の仕方が可能であり、同注釈文は、その理解の一助となる。そのうちダーキニーという語の分析についてはラトナーカラシャーンティの『グナヴァティー』の記述を下敷きにしているので、当該箇所は【資料3】に示した。

また、『アームナーヤマンジャリー』からは、第 1 章 5 偈後半句から 8 偈前半句、また 13 偈についての注釈も回収されるので、あわせてその梵文と和訳とを提示する。途中で挿入される本書第 4 章に対応する偈の注釈については割愛した。

写本は梵文と藏文のバイリンガル写本であり、梵文は奇数行、藏文は偶数行で交互に記される写本である。その中から梵文のみを抜き出したため、表記するのは奇数行のみである。梵文において太字は偈頌の文言を示す。また偈頌は写本には記されないため、Skorupski 1996 から抜き出して下記のテキストに挿入した（GSS 本によって訂正した場合はその旨を記した）。テキストの綴り字や連声は適宜標準化し、分節記号やアヴァグラハは適宜添削した。チベット訳では D1198, 37b7-40a4 に対応する。

⁸⁷ 梵本の詳細については苦米地 2017 を参照。

Āmnāyamañjarī

(fols. 108v3–111r5, 112v5–115r5)

[*Samāyoga* 1.11cd +1.2cd]

(sarbavuddhādīsthiracalasarvabhāvo bhavaty asau |

sarbavuddhasamāyogaḍākinījālasamvaraḥ ||)⁸⁸

(108v3) evaṃ ayaṃ catuḥkāyātmā bodhicittavajraḥ **sarbavuddhabodhisattvā-**
dīsthira^(108v5)**calasarvabhāvasvabhāvo**⁸⁹ **bhavati** | svacittavyatiriktānāṃ
 hi sthiraṇāṃ apy abhāvaḥ⁹⁰ |

[§1] ko 'sāv evaṃ ity āha—**sarvetyādi** | [§1.1] **sarbavuddhā** ^(109r1)
 ādarśādiḥjñānarūpā vairocanaḍayaḥ, taiḥ saha śūnyataikarasa-
 jñānāmṛtamayatayā sarvabuddharūpatvena jagadartha^(109r3)m
 āvirbhūtasya vajrasattvasya **samāyogo** mahāsukhamayyāṃ trayodaśyāṃ
 vajradharabhūmau milanaṃ yasya |

[§1.2]⁹¹ sa⁹² ca dānaṃ dāḥ,⁹³ ^(109r5) ākāśagamanam⁹⁴ | dāśabdāt tṛtiyā | ⁹⁵ ak
 ag kuṭilāyāṃ gatau | ⁹⁶ atra sarvato-gamanaṃ kuṭilā gatiḥ | dā akituṃ⁹⁷ śīlam
 asyā iti | ^(109v1) ṛddhyāparimitakāyair yugapat sarvato-gāminīty arthaḥ |
 kvacid anyatra vajragrahaṇaṃ bāhyaḍākinīvyavacchedārtham | ^(109v3)

⁸⁸ *Samputa* 1.3.7 ≈ *Samāyoga* 4.7 ≈ *Samāyoga* 1.11cd + 1.2cd.

⁸⁹ sarvabhāvasvabhāvo] em., savabhāsvabhāvo Ms. Tib. dngos po thams cad kyi rang bzhin.

⁹⁰ abhāvaḥ] em., abhāvāt Ms. 但し abhāvāt と訂正することも可。

⁹¹ この一段は『グナヴァティー』の記述が下敷きとなっている。【資料3】参照。

⁹² sa は samāyogaḥ を指すか。但し『グナヴァティー』によると dai を指すか。あるいはたとえば次のような一文が脱落している可能性もある。sa ca ḍākinyaś cāsau iti sarvabuddhasamāyogaḍākinīyaḥ.

⁹³ dāḥ は単音節 ā 語幹名詞の単数・主格形を表す。

⁹⁴ Cf. Dhātupāṭha (Böhtlingk 1887) 1.1017 dīṇ viḥayasā gatau; Cāndravyākaraṇa Dhātupāṭha 1.487: dīṇ ākāśagamanam, 4.85: dīṇ gatau (Liebich 1902: 15*, 24*).

⁹⁵ この場合の dā は単音節 ā 語幹名詞の単数・具格形を表す。

⁹⁶ Dhātupāṭha (Böhtlingk 1887) 1.829–830. Cāndravyākaraṇa Dhātupāṭha (Liebich 1902: 17*) 1.534.

⁹⁷ 連声を適用すれば ḍākituṃ となる。dā は単音節 ā 語幹名詞の具格形。

vajrās⁹⁸ ca tā niṣprapañcajñānamayyo ḍākinyaś ceti vajraḍākinyarthāt |
 atraivaṃ sarvato-gatyaiva vyavaccheda (109v5) ity ākūtam |
 atha vā ḍātum nirālambanaññānam ātmikartum śīlam asyā iti ḍāyinī,
 nairukte⁹⁹ ki sati **ḍākinī** |¹⁰⁰

ḍākinī prajñā śūnyatā (110r1), **jālam** upāyaḥ karuṇā, tābhyāṃ **śaṃ**
 sukhaṃ **varam** utkr̥ṣṭaṃ yasya, niṣprapañcatva-mahattva-nirantaratva-
 niravadhikālā(110r3)vasthāyitvotkarṣais¹⁰¹ | tad avadyebhyo bahiṣkṛtya vṛṇoti
 veti¹⁰² **ḍākinijālasamvaraś** ca nītārthe |

[§2] neyārthe tu **sarvabuddhasamāyogena** (110r5) rūpaskandhādirūpavairo-
 canādīmilanena, ḍākinyo 'dhyātmaṃ rajorūpā vā nāḍyo vā tāsāṃ **jālam**¹⁰³
 samūhaḥ, tat bhagavān śukrātmā (110v1) milanena saṃvṛṇoti nirāvaraṇamahā-
 sukhaikarasīkarotīti **ḍākinijālasamvaraś** ca |

[§3] atha vā **sarvabuddhasamāyogena** maṇḍalacakre vairocanādīmilanena
 (110v3) daśasu dikṣv ākāśagamanaśandaśānaśīlā¹⁰⁴ **ḍākinyo jālam** māyā
 yasya |

jālam vṛndagavākṣayoḥ

kṣārakānāyadambhe ca (110v5)

⁹⁸ vajrās] em., vajrās Ms.

⁹⁹ nairukte] em., nairuktai Ms. Cf. Tib: nges pa'i tshig la.

¹⁰⁰ ḍākinī |] em., om. Ms. この一節は次のテキストに基づく（房氏のご教示による）。Bhavabhaṭṭa, *Cakrasaṃvaravivṛti*: ḍātum nirālambanaṃ jñānam ātmikartum śīlam asyā iti ḍāyinī, nairukte kakāre ḍākinīti syāt. See Bang 2019, §3.4.1.

¹⁰¹ nirantaratva-niravadhikālāvasthāyitvotkarṣais] em., -niruttaratvaniravadhikalāvasthāyitvautkarṣaiḥ Ms. Cf. Tib: rgyun mi 'chad pa nyid dang mthar thug pa med pa'i dus su gnas pa nyid mchog.

¹⁰² この一節は次のテキストに基づく。Bhavabhaṭṭa, *Cakrasaṃvaravivṛti*: ḍākinī śūnyatā. jālam upāyam. (...) tābhyāṃ saṃ sukham avadyebhyo bahiṣkṛtvā vṛṇotīti ḍākinijālasamvaraḥ. See Bang 2019, Text §3.4.2.

¹⁰³ jālam] em., jāla Ms.

¹⁰⁴ ākāśagamanaśandaśānaśīlā] em., ākāśagamane sandarśanaśīlā Ms.

ityukteḥ¹⁰⁵ | hastyādimāyāvad¹⁰⁶ akṣobhyāditathāgatānām¹⁰⁷ striyā¹⁰⁸
vineyajanāvarjanāya gauryādivajradevīrūpamāyā(111r1)darśanāt |
sa ca samvaraś ceti **sarvabuddhasamāyogaḍākinijālasamvaro** vajradhara eva
phalatantrasvarūpaḥ¹⁰⁹ kāyacatuṣṭayātmā, (111r3) paramā svārthasampattiḥ
parārthasampac ca | phalatantratām pūrvam sattvaśabdenāsādhāraṇīm¹¹⁰
sākṣāt, paraṃparayā¹¹¹ tu sādhāraṇīm prasaṅgād abhidhāyādhunā (111r5)
prādhānyenābhidhatte | (111r5-112v5: omitted)

[*Samāyoga* 1.5cd]

(*duścāriṇyo 'pi sidhyante sarvalābhasukhotsavaiḥ* ||)¹¹²

duṣṭeṣv a(113r1)kuśaleṣu carituṃ śīlaṃ yāsāṃ | tā api akuśalebhyo¹¹³ viratyā
kuśalānuṣṭhānaparāś¹¹⁴ tathā **sidhyanti** | katham | sarvai(113r3)r¹¹⁵
yathāmilitarūpādiviṣayopabhogāliṅganacumbanavajrapraveśādibhir
labhyata iti **sarvalābham**¹¹⁶ ca tat **sukham** ca sahaJam (113r5) tasyotsavā
uttarottarānubandhina utpādās **tair**¹¹⁷ upādānakāraṇaiḥ |

¹⁰⁵ ukteḥ] em., uktiḥ Ms. 典拠不明。Cf. *Amarakośa* 3.3.766: jālaṃ samūha ānāyagavākṣakṣārakeṣv api.

¹⁰⁶ -māyāvad] em., -māyādad Ms.

¹⁰⁷ akṣobhyādi-] em., akṣobhyādis Ms.

¹⁰⁸ striyā] em., stri Ms. Cf. Tib: bud med kyis (*striyā). striyā と訂正せずに stri- と訂正することも可。

¹⁰⁹ phala-] em., phalan Ms.

¹¹⁰ *Samputa* (Skorupski 1996: 233): sarvabuddhamayaḥ sattvo vajrasattvaḥ paraṃ sukham.

¹¹¹ チベット訳は sākṣāt paraṃparayā をコンパウンドとして理解している。

¹¹² ≈ *Samāyoga* 1.5cd. (= *Samputa* Ms. B, om. Ms. A.)

¹¹³ akuśalebhyo] em., akuśale Ms.

¹¹⁴ Tib. dge ba'i rjes su bsgrub pa la lhur len pa rnam kyis.

¹¹⁵ sarvair] em., sarver Ms.

¹¹⁶ sarvalābham] em., sarvalābhaś Ms.

¹¹⁷ tair] em., taur Ms.

[*Samāyoga* 1.6]

(*sarvastrīmāyayā siddhāḥ svarūpaparivartanaḥ* |
vicitramāyāmudreyaṃ ḍākinīti ca milicchayā ||)¹¹⁸

tās ca sarvāḥ¹¹⁹ striyaḥ kramadvayadevatāsvarūpeṇādhimuktavyā ity
 āha—(113v1) **vicitreti**, vajravārāhyādinānārūpā | **māyā** paramārthato
 niḥsvabhāvatve 'pi saṃvṛtyā pratibhāsamānatvāt | **mudrā** vakṣyamāṇa-
 (113v3) vyutpattyā | saiva **ḍākinī** | katham | **iti** vakṣyamāṇayā **mlecchayā**
 bhagavataḥ saṃketena | tathā hi **ḍai** ityādi |

[*Samāyoga* 1.7]

(*ḍai vaihāyasagamane dhātur atra vikalpitaḥ* |
sarvākāśacarā siddhir ḍākinīti prasidhyati ||)¹²⁰

vaihāyasaga(113v5) **manam**¹²¹ śūnyatādhigatiḥ | ata evāha—**sarvākāśam**,
 sarvadarmanaiḥsvābhāvyam, tac carati¹²² tanmayibhavatīti **sarvākāśacarā** |
 sidhyaty anayeti **siddhiḥ** | sā¹²³ ḍākinī (114r1) prajñāpāramitāsvarūpatvāt |
ity evam-uktastrīṣv iyaṃ tādātmyenādhimucyamānā | kvacid **itir** iti pāṭhaḥ |
 tadā (114r3) eti gacchati bhāvādyabhiniveśo 'nayeti itiḥ | mudrety uddiṣṭam
 nirdiśati—**sarvata** iti |

[*Samāyoga* 1.8ab]

¹¹⁸ GSS 本による。 *Samputa* 1.3.9 (Skorupski 1996: 233) = *Samāyoga* 1.6.

¹¹⁹ sarvāḥ] em., sarvā Ms.

¹²⁰ GSS 本による。 *Samputa* 1.3.10 (Skorupski 1996: 233–234) = *Samāyoga* 1.7.

¹²¹ -gamanam] em., -gamana Ms.

¹²² carati] em., careti Ms.

¹²³ sā] em., sa Ms.

(*sarvato viśvamudrā tu sarvato viśvasaṃvarair iti*)¹²⁴

sarvato daśasv dikṣu **viśvaṃ**¹²⁵ skandhā(114r5)dikaṃ mudrayati mudam rātiti
vā viśvasya **mudrā viśvamudrā** | katham | **sarvato** rūpādiviṣayopabhogato
viśvair¹²⁶ vi(114v1)śvasvabhāvaiḥ sukhair **varair** uttamaiḥ, śūnyatayā
pariśuddhatvāt |

[*Samāyoga* 1.13]

(*vajraṃ vajradharaś caiva padmaṃ padmadharas tathā* |

mañir mañidharaś caiva bhavanti eṣāṃ kulāni ca ||)¹²⁷

ityevaṃ cādhimuktalocanādideviśvabhāvā(114v3)nām **āsāṃ kulāni bhavanti** |
vajram advayañānātmākṣobhyaḥ | **vajradharo** vajrasatvaḥ | padmam
iva **padmaṃ** vairocano jaladoṣā(114v5)bādhitapadmavat saṃsāradoṣair
abādhitatvāt | sarveṣāṃ¹²⁸ tathāgatānāṃ nirāvaraṇatvasūcanaprayojana
ihopacāra¹²⁹ upalakṣaṇaparaḥ | (115r1) **padmadharo** 'mitābhaḥ |
maṇiyogān **maṇi**¹³⁰ ratnasambhavaḥ | **mañidharo** 'moghasiddhiḥ, mañeḥ
khaḍgaratnasya¹³¹ dhāraṇāt | vajra(115r3)dharādinām anyatamarūpeṇa
svasvaḍākiniparikareṇātmanāṃ niṣpādayan yogi sidhyatīti bhāvaḥ | evam
anena jñāna(115r5)mudrāpi sūciteti¹³² vadanti |

¹²⁴ *Samputa* 1.3.11 (Skorupski 1996: 234) ≈ *Samāyoga* 1.8ab.

¹²⁵ viśvaṃ] em., viśva Ms.

¹²⁶ -opabhogato] em., -opabhogator Ms. Cf. Tib: longs spyod pa la.

¹²⁷ *Samputa* 1.3.12 (Skorupski 1996: 234) ≈ *Samāyoga* 1.13.

¹²⁸ sarveṣāṃ] em., sarveṣaṃ Ms.

¹²⁹ ihopacāra] em., ihopācāra Ms.

¹³⁰ maṇi] em., maṇi Ms.

¹³¹ -ratnasya] em., -ratnasyā Ms.

¹³² sūciteti] em., sūcateti Ms.

『アームナーヤマンジャリー』試訳

[サマーヨーガ 1 章 11 偈・2 偈後半]

この御方は、一切仏を始めとする不動・動のすべての存在をもつものであり、サルヴァブッダ・サマーヨーガ・ダーキニージャーラ・サンヴァラである。

同様に、この、四身を本質とする菩提心金剛は、「一切仏」と菩薩を「始めとする不動・動のすべて存在の本性」である。というのは、自心とは別個なる不動なるものたち（器世間）もまた、存在しないからである。

[§1 題目の語義：了義における解釈]

そのような「この御方」(sāv) とは何なのかというと、次のように言う。「一切」云々¹³³。

(§1.1 サルヴァブッダ・サマーヨーガの語義)

「一切諸仏」(sarvabuddhā) とは、大円鏡智などを本質とする毘盧遮那など。彼らと共に、空性と一味なる智の甘露から成る者であるゆえに、一切諸仏を本質として、世界の利益のために現れ出た金剛薩埵の「サマーヨーガ」(samāyogo) つまり結合(milanam) が、大楽から成る第 13 [地] たる持金剛地において(vajradharabhūmau) 存するところのもの [が、サルヴァブッダ・サマーヨーガである]¹³⁴。

(§1.2 ダーキニー・ジャーラ・サンヴァラの語義)

¹³³ *Saṃputa* 1.3.7cd ≈ *Samāyoga* 4.7cd ≈ 1.2cd.

¹³⁴ sarvabuddhasamāyoga という語を所有複合語として説明し、「一切諸仏との結合を有する者」の意味で理解する。

そしてそれ (sa)¹³⁵ は、[ḍākinijālasaṃvara であるのだが、ḍākinī という語の] ḍā は、ḍāna [の意味] であって、「虚空を行く」(ākāśagamanam) [という意味である]¹³⁶。ḍā という語の直後には第3格[の格語尾 ā が接続している]¹³⁷。動詞語根√ ak および√ ag は「曲がりくねって行く」という意味で[使用される](kuṣṭilāyām gatau)¹³⁸。この場合、「曲がりくねって行く」とは「遍く行きわたる」(sarvatogamanam) ということである。[それゆえ ḍākinī とは]「虚空を行くことによって」(具格としての ḍā)「遍く行きわたる習性」(akitum śīlam) が存する女性 (asyā) という意味である¹³⁹。神足を通じて無量の身体によって同時に遍く行き渡る女性 (sarvatogāmini) という意味である¹⁴⁰。

ある別のところ(テキスト)で¹⁴¹、「金剛」という語が[ダーキニーに付されるのは]、[仏教] 外部のダーキニーたちを除外するためである。「金剛たちであり、かつ、彼女ら無戲論の智から成るダーキニーたちである¹⁴²」という、「金剛ダーキニー」のもつ意味による (vajraḍākinīyarthāt)。本書(『サンプタ』)でも同様に、必ず遍く行き渡ることによって (sarvatogatyaiva)、[仏教外部のダーキニーを] 除外することが意図されている (ākūtam)。

あるいは、「虚空を行く[習性]」(ḍātum)、つまり無所縁の智を自分のものとする習性が存するところの女性、というのが「ダーイニー」(ḍāyini、虚空を行く女性)である。[この ḍāyini の y 音に代えて] ニルクティとしての k 音が存す

¹³⁵ sa は sarvabuddhasamāyogah を指し、この語が ḍākinijālasaṃvara と接続して持業積複合語 (karmadhāraya) を形成しているという説明とみられる。それは 110r3 の ḍākinijālasaṃvaraś ca nitārthe につながっており、繋げると、sa ca ḍākinijālasaṃvaraś ca nitārthe となる。

¹³⁶ 本記述が元にしたであろう『グナヴァティー』において、√ ḍai の ai 音が ā 音に代置されて ḍā になることを説くが(下記資料3参照)、ここにはその記述がない。sa ca の箇所の読みについてはさらなる検討を要する。なお ḍah は単音節 ā 語幹名詞 ḍā の単数・主格である。ḍāna は√ ḍai に名詞接辞 ana が接続した名詞形で、「虚空を行くこと」を意味する。

¹³⁷ √ ḍā の具格形が ḍā であることを述べている。ḍā は単音節 ā 語幹の語根名詞 (mono-syllabic root noun) のため、ḍā がその具格形となる。Whitney 1950: 125, §§349–351 参照。Isaacson 氏の教示による。

¹³⁸ Dhātupāṭha 1.829–830.

¹³⁹ ḍā akitum は連声を適用すれば ḍākitum となる。śīlam は、女性形接尾辞 ī のもつ意味の説明も含んでいる。

¹⁴⁰ 「神足を通じて」が ḍā の説明であり、「遍く行き渡る」が ak の説明に相当する。

¹⁴¹ 例えば Mahāmāyātānta を指す。

¹⁴² つまり持業積複合語として分析される。

るので (nairuktau ki sati)、「ダーキニー」という¹⁴³。

「ダーキニー」は般若・空性であり、「ジャーラ」は方便・大悲であり、この両者に基づいて、śaṃつまり楽、varaつまり卓越したものが存するところのもの〔がダーキニー・ジャーラ・サンヴァラ〕であり¹⁴⁴、〔それは〕無戲論・偉大性・無断絶性・時間的制限なく存在する性質という卓越性による。

あるいは、それ（つまり楽）を諸々の罪惡から外に取り出して庇護する (avadyebhyo bahiṣkṛtya vṛṇoti¹⁴⁵) というのが、了義におけるダーキニー・ジャーラ・サンヴァラである¹⁴⁶。

〔§2 題目の語義：未了義における解釈〕

一方、未了義においては、「一切仏のサマーヨーガ」による (sarvabuddha-samāyogena)、つまり色蘊などを性質とする毘盧遮那などの結合による (-milanena)、「ダーキニーたち」、つまり内的な（観想上の）血を性質とするものたち、あるいは脈管たち、その彼女らの、「ジャーラ」つまり集合である (samūhaḥ)。それ（つまりダーキニー・ジャーラ）を、精液たる世尊（菩提心金剛）が、結合によって (milanena) 集める (saṃvṛṇoti)、つまり障り無き大衆と一味化する、というのが、ダーキニー・ジャーラ・サンヴァラである¹⁴⁷。

〔§3 題目の語義：第三の解釈〕

あるいはまた、「一切諸仏とのサマーヨーガによって」(sarvabuddha-samāyogena)、つまり曼荼羅輪における毘盧遮那などとの結合によって (-milanena)、十方において、虚空を行くことについて示現する習性を持つ「ダーキニーたち」たる、「ジャーラ」つまり幻 (māyā) が存するところのもの〔が、サルヴァブッダ・サマー

¹⁴³ この一節および次の一節の典拠とみられる Bhavabhaṭṭa の *Cakrasaṃvaraviṃśati* の該当箇所については校訂テキストの注記を参照。

¹⁴⁴ つまり所有複合語であり、「ダーキニーと網とによる最勝楽を持つ者」という意味となる。

¹⁴⁵ saṃvara について、「楽 (śaṃ) を庇護するもの (vṛṇoti)」と理解する解釈。

¹⁴⁶ ここでは「一切諸仏との結合を有する者であり、かつダーキニーとジャーラ（般若と方便）とに基づき最勝楽（または楽の庇護）を有する者」という意味で解釈されている。ダーキニーの語は、「虚空を行くことにより遍く行き渡る者」、または「所縁なき智を自分のものとする習性をもつ者」の意味で解釈されている。前者はラトナーカラシャーンティ、後者はバヴァバッタの理解に各々拠っている。

¹⁴⁷ 「一切仏の結合によってダーキニーの集合と一体化するもの」という意味となり、精血の一体化が意図される。

ヨーガ・ダーキニージャーラ] である¹⁴⁸。

「ジャーラ」は、「集積」や「格子」の意味で[使用され](*vṛṇḍagavākṣayoh*)、また「捕鳥網」「漁網」「騙し」の意味で[使用される]、

という言説があるからである(*ukteḥ*)。象などの幻のように、阿閼如来などは、女性によって所化の人々を惹きつけるために、ガウリーなどの金剛妃の姿の幻を示すからである。

そしてそれ(つまりジャーラ)であり、サンヴァラであるというのが、「サルヴァブッダ・サマーヨーガ・ダーキニージャーラ・サンヴァラ」であり¹⁴⁹、持金剛にはかならず、果のタントラを本質とし、四身を本体とする御方であり、最勝の自利・利他の完成である。

先には[持金剛が] 果のタントラであることを、「衆生」という語¹⁵⁰により不共のものとして、しかし間接には共通のものとして、帰納的に(*prasaṅgena*)言明した後に、今、主たるものとして(*prādhānyena*)、[果のタントラが不共であることを] 言明する。(111r5-112v5 は省略)¹⁵¹

[サマーヨーガ1章5偈後半句]

悪行の女性たちでさえ、一切による獲得たる安楽の宴によって成就する。

諸々の凶悪なる不善行を為す習性が存するところの彼女が[「悪行の女性たち」(*duścāriṇyo*) である]。彼女ら「でさえ」(*api*) 不善行を退けることによって、善行の実践に専念し、そのように「成就する」(*sidhyanti*)。どのようにしてか。臨機して(*yathāmilita*) 色などの[五] 境の享楽や抱擁や接吻や金剛

¹⁴⁸ つまりこの語全体は所有複合語として理解されている。

¹⁴⁹ つまり「一切諸仏との結合によってダーキニーたちという幻を持つ者であり、かつサンヴァラなるもの」という意味で解釈される。

¹⁵⁰ *Saṃpūṭa* (Skorupski 1996: 233); *sarvabuddhamayaḥ sattvo vajrasattvaḥ param sukham*.

¹⁵¹ 次の偈に続くが、『サマーヨーガタントラ』との平行偈ではないため割愛する。

挿入 (vajrapraveśa) などの一切によって獲得されるから、「一切による獲得」(sarvalābhāṃ) であり、かつ、それは「安楽」(sukhaṃ)、つまりサハジャ（俱生）なる [安楽] であり、それ（安楽）の「宴 / 高まり / 喜悅」(tasyotsavā)、つまり後々へと連続する [安楽の] 生起 (utpādās) である。それらの主要因「によって」[成就するのである]。

[サマーヨーガ 1 章 6 偈]

[女性たちは] 一切の女性の幻を通じて、自身の姿の転変によって成就する。そして非サンスクリット言語に準じて、この多様で美しい幻たるムドラーはダーキニーといわれる。

そしてそのすべての女性たちは、[生起と究竟との] 二次第における [多様な] 尊格の本質をもつものとして、信解されるべし。それゆえに「多様で」と (vicitreti) 言う。[多様とは] ヴァジラヴァーラーヒーなどの様々な姿を持つ女性である。[彼女は]、勝義としては無自性だが、世俗としては顕現しているから、「幻」(māyā) である。後述する語義分析¹⁵²によって、「ムドラー」である。その同じ彼女こそが、「ダーキニー」である。どのようにしてか。「と」(iti) と直後に述べられる「非サンスクリット言語によって」(mlecchayā)、つまり世尊のとりきめによって (saṃketena)。すなわち、ḍai、云々 [の次の偈で語られるとりきめによってである]。

[サマーヨーガ 1 章 7 偈]

これ (ḍakini という語) における動詞語根である ḍai は、「虚空を行く」という意味において考えられている。その歩みが全虚空に行き渡る悉地が、ダーキニーである、と広く知られている。

¹⁵² 「刻印する (mudrayati)、あるいは、喜悅 (muda) を恵む (rāti) から」ムドラーという。下記 8 偈の注釈参照。

「虚空を行く」とは、空性を理解することである。まさにそれゆえに次のよう
いう。「全虚空」、つまり一切諸法無自性たること、それが行く (carati) とは、
それから成るものになる (tanmayibhavati) という [意味] であり、[それが]「全
虚空に行きわたる」ということである。これによって成就するから「悉地」(完
成の手段) という。それ (悉地) は、般若波羅蜜を自体としているから、ダーキニー
である。「と」(iti) と、以上のように説かれた女性たちに中で、彼女 (ダーキニー)
は、同体であると (tādātmyena) 信解されているものである。

ある [異本] において、[iti の代わりに] itiḥ という読みがある (kvacid itir
iti pāṭhaḥ)。その場合、「赴く」、「行く」(eti gacchati) [という意味であり]、こ
れによって存在などに執着すること (bhāvādyabhiniveśo 'nayā)、というのが itiḥ
[の意味] である¹⁵³。[次の偈では、前に]「ムドラー」と説示されたことを説明
する。「遍く」云々と。

[サマーヨーガ1章8偈後半]

[ダーキニーは]、遍く一切の最勝樂によって、遍く一切のムドラーであ
る、と [広く知られている]。

「遍く」(sarvato)、つまり十方において、一切つまり蘊などを (viśvaṃ skandhādikaṃ)
刻印する (mudrayati)、あるいは、喜悅を恵む (mudam rāti) から [ムドラー
と言われ]、一切についてのムドラーが (viśvasya mudrā)、「一切のムドラー」
(viśvamudrā) である。どのようにしてか。「遍く」、つまり色などの対象の享
樂にもとづいて、「一切」(viśvair) の、つまり一切を自己の本質として有する
(viśvasvabhāvaiḥ)、「最勝」(varair) つまりの最高の (uttamaiḥ) 安樂によって (つ
まり viśvaśaṃvara によって) [ダーキニーは sarvato-viśvamudrā なのである]。

¹⁵³ ここでは、iti「〜と」という偈の読みについて、itiḥ という異読を挙げる (つまり偈の d 句を
dākinītiḥ prasidhyati とする異読)。アバヤーカラグプタはこれを、動詞語根√i に名詞接尾辞 -ti を
付した、「行く」手段、「執着する」手段を意味する名詞として理解している。偈頌にこの異読を当て
はめると、「ダーキニーに執着することが」(dākinītiḥ) と訳しうる。

なぜならば、空性によって浄化されているからである。

[サマーヨーガ1章13偈]

[この幻は] 金剛、持金剛、蓮華、持蓮華者、宝珠、持宝珠、そしてそれらの族となる。

このような仕方（つまり前半句所説のように）、信解されたローチャナーなどの妃を本性とする「彼女ら（ダーキニーたち）の族となる」。¹⁵⁴ [すなわち]「金剛」とは不二智を自体とする阿閼である。「持金剛」とは金剛薩埵である。蓮華の如きものが、「蓮華」であり、毘盧遮那である。なぜならば、[毘盧遮那は] 水中の汚損によって損なわれない蓮華のように、輪廻の汚損によって損なわれることがないからである。ここにおける（つまり蓮華という語がもつ）比喩的表現 (upacāra) は、すべての如来が障害を持たないことを示唆するという目的を持ち、[すべての如来を]暗示することを専らにしている。「持蓮華」とは阿弥陀である。宝珠を備えているゆえに、「宝珠」とは宝生如来である。「持宝珠」とは不空成就である。なぜならば、宝珠は、宝刀 (khaḍgaratna) を持つからである¹⁵⁴。持金剛など [上記の六者] の間のどれか一尊の姿でもって、各自のダーキニーに奉仕するものとして、[観想の中で] 自分自身を完成させる瑜伽者は、成就する、という意図である。このように、このことによって、知のムドラーもまた暗示された、と人々はいう。

【資料3】『グナヴァティー』と『ムクターヴァリー』のダーキニーの語釈箇所

下記はダーキニーの語義説明を行う、ラトナーカラシャーンティの『グナヴァティー』と『ムクターヴァリー』の一節である¹⁵⁵。特に『グナヴァティー』は【資料2】所掲の『アームナーヤマンジャリー』の解説の元になっているとみられ、その正確な理解に必要な資料であるためここにテキストと和訳を提示す

¹⁵⁴ つまり六族を、金剛界の五仏と金剛薩埵の都合六尊として理解している。

¹⁵⁵ 類似する説明は D 1401, 2b6-3a1 などにもみられる。

る。テキストの太字は、刊本を Harunaga Isaacson の訂正によって改めた箇所である¹⁵⁶。

『グナヴァティー』

ḍai vaihāyasagamane |¹⁵⁷ aikāraśyātvam | ḍānaṃ ḍā ākāśagamaṇam
iti arthaḥ | ḍāśabdāt tṛtiyā | ak ag kuṭilāyāṃ gatau |¹⁵⁸ atra sarva-
togamaṇam kuṭilā gatiḥ | ḍā¹⁵⁹ akituṃ śīlam asyā iti ḍākinī | **ṛddhyā**
kāyakoṭṭiniyutaśatasahasrair yugapat sarvatogāminīty arthaḥ | tathā
coktaṃ—

ḍai vaihāyasagamane dhātur atra vikalpitaḥ |

sarvākāśacarā siddhir ḍākinīti prasidhyati || (*Samāyoga* 1.7)

iti | vajragrahaṇam bāhyaḍākinīvyavacchedārtham | **vajrās ca**
niḥprapañcajnānamayatvāt, ḍākinyaś ceti vajraḍākinyaḥ |¹⁶⁰

[試訳] √ ḍai は、「虚空を行く」という意味で [使われる]。[ḍai の] ai 音に代えて ā [音が置かれる]。[そして] ḍāna (虚空を行くこと) が、ḍā [の意味]であり、「虚空を行くこと」という意味である。[ḍākinī という語のでは] ḍā という語の直後には第3格 [の格語尾 ā が接続している]¹⁶¹。√ ak は√ ag は、「曲がりくねって行くこと」の意味で [使われる]¹⁶²。この場合、「曲がりくねって行く」とは、「あらゆるところに行くこと」である。「虚空を行くことによって」(具格としての ḍā)、「あらゆるところに行く」(ak) 習性(śīla) が存するところの女性、というのが、ḍākinī である。神足によって幾千億もの身体を用いて (ḍā の語義)、同時にあらゆるところに行く (ak の語義) 女性、という意味である。そ

¹⁵⁶ Isaacson 2015.

¹⁵⁷ Cf. Dhātupāṭha 1.1017 ḍin vihāyasā gatau.

¹⁵⁸ Dhātupāṭha 1.829–830.

¹⁵⁹ Cf. *Guṇavati*, p. 3.12: ḍāśabdāt tṛtiyā; *Muktāvalī*, p. 155.11–12: tayāṅkituṃ (read: tayākituṃ) śīlam āsām iti ḍākinyaḥ.

¹⁶⁰ *Guṇavati*, p. 3.10–19.

¹⁶¹ ḍā は単音節語幹名詞 ḍā の具格形 (同形)。『アームナーヤマンジャリー』の平行箇所参照。

¹⁶² Dhātupāṭha 1.829–830.

して次のように言われる。

動詞語根√*ḍai* は、ここにおいて、「虚空を行く」という意味で考えられている。その歩みがあらゆる虚空に行き渡る悉地が、ダーキニーであると広く知られている（『サマーヨーガ』1.7）。

と。「金剛」という語は、[仏教] 外部のダーキニーたちを除外するためである。無戲論の智から成っているゆえに諸々金剛であり、かつ、ダーキニーたちである、というのが、「金剛なるダーキニー」である¹⁶³。

『ムクターヴァリー』¹⁶⁴

ḍākininām iti | ḍai vaihāyasagamane | ḍānaṃ ḍā ṛddhyabhijñā | tayāṅkituṃ
(read: tayākituṃ) *śīlam āsām iti ḍākinyaḥ | aṅkanaṃ* (read: akanam) *kuṭilā gatiḥ |*
ṛddhyā yugapad daśasu dikṣu gatiśīlāḥ siddhayoginyo ḍākinya ity arthaḥ |

[試訳] 「*ḍākininām*」について、動詞語根√*ḍai* は、虚空を行くことという意味で[使用される]。「虚空を行くこと」(*ḍānaṃ*) が、*ḍā* の意味であり、神足や神通のことである。それ(*ḍā* つまり神足など)によって、曲がって行く(*akitum*) 習性が存するところの女性たち、というのがダーキニーである。*akana* (*ḍākini* の語中に含まれる√*ak* から派生した名詞) は、「曲がりくねって行く」ということである。[つまり] 神足によって、十方に行く習性を持つ成就者の瑜伽女たちがダーキニーである、という意味である。

¹⁶³ 持業釈複合語の説明。

¹⁶⁴ p. 155. 11–13, on Hevajra 2.3.4.

参考文献一覧

(梵文資料)

Āmnāyamañjarī 『アームナーヤマンジャリー』

Rare and Ancient Tibetan Texts Collected in Tibetan Regions Series, vol. 1: *Dpal yang dag par sbyor ba'i rgyud rgyal po'i rgya cher 'grel pa* (喜金剛吉祥正加行续王之注解). Compiled by Institute of the Collection and Preservation of Ancient Tibetan Texts of Sichuan Province, Chengdu; Sichuan Nationalities Publishing House/ Beijing: Guangming Daily Press, 2015.

Guṇavatī 『グナヴァティー』

Mahāmāyātantram with Guṇavatī by Ratnākaraśānti. Ed. Samdhong Rinpoche & Vajravallabh Dwivedi. Rare Buddhist Text Series 10, Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1992.

Muktāvalī 『ムクタヴァリー』

Hevajratantram with Muktāvalī Pañjikā of Mahāpaṇḍitācārya Ratnākaraśānti. Ed. Ram Shankar Tripathi & Thakur Sain Negi. Bibliotheca Indo-Tibetica Series 48. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 2001.

Samāyoga 『サマーヨーガ・タントラ』

Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvara. (1) Ed. Central Institute of Higher Tibetan Studies, *Dhīḥ: A Journal of Rare Buddhist Text* 58, 2018, pp. 141–201. (Dhīḥ 本と略す)。(2) Eds. Griffiths, A., A.G.J.S. Sanderson & P.-D. Szántó, *The Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvara*, forthcoming. (GSS 本と略す)。

(和文論文)

静 春樹

2007 『ガナチャクラの研究：インド後期密教が開いた地平』 山喜房佛書林。

田中 公明

1996 『インド・チベット曼荼羅の研究』 法蔵館。

2006 「サマーヨーガ・タントラ」『インド後期密教』（下）、春秋社、13–46 頁。

2007 「『金剛場莊嚴タントラ』の成立とインド密教史上における位置」『東洋文化研究所紀要』152、381–400 頁。

2010 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』 春秋社。

苦米地 等流

- 2017 「Abhayākara Gupta 作 *Āmnāyamañjarī* 所引文献：新出梵文資料・第1～4章より」『大正大学総合佛教研究所年報』39、99-136頁。
- 西岡 祖秀
- 1983 「『プトウン仏教史』目録部索引 III」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』6、47-200頁。
- 高橋 尚夫
- 2010 「般若理趣經の註釈的研究(7)「第十一段 降三世教令輪品」・「第十二段 外金剛部品」・「第十三段 七母女天集会品」・「第十四段 三兄弟集会品」・「第十五段 四姉妹集会品」」『豊山学報』53、97-64頁。
- 福田 亮成
- 1974 「『一切仏平等瑜伽タントラ』の一考察」『智山学報』23・24、556-570頁(『理趣經の研究:その成立と展開』国書刊行会、1987年、486-502頁に再録)。
- 松長 恵史
- 2018 「インドネシアにおける密教の展開」、肥塚隆編『アジア仏教美術論集：東南アジア』中央公論美術出版社、161-193頁。

(欧文論文)

Bang, Junglan

- 2019 “The Opening Passages of Bhavabhaṭṭa’s Commentary (*Viṃśti*) on the *Cakrasaṃvaratantra*—Remarks on his elaboration of the preamble—.”
大正大学総合佛教研究所紀要 41. (in print).

Böhtlingk, Otto

- 1887 *Pāṇini’s Grammatik*. Leipzig: Verlag von H. Haessel.

Dalton, Jacob & van Schaik, Sam

- 2006 *Tibetan Tantric Manuscripts from Dunhuang: A Descriptive Catalogue of the Stein Collection at the British Library*. Leiden: Brill.

Ijuin, Shiori

- 2018 “A Summary of the First Half of Ānandagarbha’s *Vajrajvāloḍayā*.”
Journal of Indian and Buddhist Studies 66-3, 1127-1131.

Isaacson, Harunaga

- 2009 “A Collection of *Hevajrasādhana*s and Related Works in Sanskrit.”
In: *Sanskrit Manuscripts in China: Proceedings of a Panel at the*

- 2008 *Beijing Seminar on Tibetan Studies October 13 to 17*, ed. Ernst Steinkellner, 89–136. Beijing: China Tibetology Publishing House.
- 2015 “Ratnākaraśānti’s *Guṇavatī* on the *Mahāmāyāntara*, nirdeśa 1 Notes,” Tsukuba, October 5th, 2015 (Handout).
- Jampa Samten
- 2015 *bstan bcos kyi dkar chag: Catalogue of the Narthang Manuscript Tangyur*. Library of Tibetan Works and Archives, Dharamshala.
- Liebich, Bruno
- 1902 *Cāndra-vyākaraṇa: Die Grammatik des Candragomin, sūtra, uṇādi, dhātupāṭha*. Leipzig: F. A. Brockhaus.
- Sanderson, Alexis
- 2009 “The śaiva Age: The Rise and Dominance of Śaivism during the Early Medieval Period,” In: *Genesis and Development of Tantrism*, ed. Shingo Einoo, 41–349. Institute of Oriental Culture Special Series 23. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.
- Schaefer, Kurtis R. & van der Kuijp, Leonard W. J.
- 2009 *An Early Tibetan Survey of Buddhist Literature: The Bstan pa rgyas pa rgyan gyi nyi ’od of Bcom ldan ral gri*. Harvard Oriental Series 64. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Skorupski, Tadeusz
- 1996 “The *Samputa-tantra*: Sanskrit and Tibetan Versions of Chapter One.” In: *The Buddhist Forum*, vol. 4, 191–244. London: SOAS, University of London.
- Snellgrove, David L.
- 1959 *The Hevajra Tantra: A Critical Study*. London/New York: Oxford University Press.
- Szántó, Péter-Dániel
- 2015 “Early Works and Persons Related to the So-called Jñānapāda School,” *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 36/37, 537–562.
- 2016 “Before a Critical Edition of the *Samputa*,” *Zentralasiatische Studien* 45, 397–422.

(100)

Szántó, Péter-Dániel & Griffiths, Arlo

2017 “Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālaśamvara.” In: *Brill’s Encyclopedia of Buddhism*, vol. 1: *Literature and Languages*, ed. Jonathan A. Silk, et al., 367–372. Leiden: Brill.

Tomabechei, Toru

2007 “The Extraction of *mantra* (*mantroddhāra*) in the *Sarvabuddhasamāyogatantra*.” In: *Pramāṇakīrtiḥ: Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of his 70th Birthday*, ed. Birgit Kellner, et al., pt. 2, 903–923. Vienna: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien.

Wedemeyer, Christian

2008 *Aryadeva’s Lamp that Integrates the Practices (Caryāmelāpakapradīpa): The Gradual Path of Vajrayana Buddhism According to the Esoteric Community Noble Tradition*. New York: American Institute of Buddhist Studies.

Whitney, William Dwight

1950 *Sanskrit Grammar: Including both the Classical Language, and the older Dialects of Veda and Brahmana*. London: Geoffrey Cumberlege.

(本論文の草稿段階において、苫米地等流氏、Harunaga Isaacson 氏、種村隆元氏によるご教示を受けました。記して謝意を表します)

(平成 30 年度科学研究費助成、課題番号 [18H03569] [17K0022] [16K13154] [18K00074][16K02171] の研究成果)